

『旧倫理』

問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 人間としての在り方生き方に関わる倫理的諸課題について多面的・多角的に考察する過程を重視する。文章や資料を読み解きながら、先哲の基本的な考え方等を手掛かりとして考察する力を求める。問題の作成に当たっては、倫理的諸課題について、倫理的な見方や考え方を働かせて、思考したり、批判的に吟味したりする問題や、原典資料等、多様な資料を手掛かりとして様々な立場から考察する問題などを含めて検討する。」

2 各問題の出題意図、解答結果及び自己評価等

問題作成部会では、上記の作成方針にもとづいて、現代の高校生が、日常的に直面する具体的な倫理的諸課題を、教科書で学ぶ先哲の知見と関係づけて批判的に吟味する力、そして原典資料や科学的データを適切に読み取りそれにもとづいて考察する力を評価できるような問題作成に努めた。

第1問では、古代における個人のあり方や社会との関係を、規則・法令・規範・戒律などの人が作り出したきめごと、「ルール」を紐帯として捉えることによって、その根源となる世界観や、ルールを設定する目的として想定されている秩序のすがたを問うた。ルールの設定やその実践に関する諸相を比較・相対的に見つめなおすことによって、それらの異同や変化から、ルールの存在意義とその背景にある他者の価値観を考える問題を設けた。

問1では、法則や規範の根源となる宇宙や世界の捉え方に関する知識について問うた。古代ギリシアと中国の双方の諸思想から正しい記述を選ばせる形式の出題とした。

問2では、仏教・ジャイナ教における戒律についての知識を問うた。在家者に課された戒めの詳細や、大乘仏教の徳目の理解をも問うことで、宗教者の生活実態や宗教思想の変遷をも伺うことができる戒律の重要性に目を向けさせる問題とした。

問3では、中国における儒家と法家の思想の差異について、法家の原典資料から正確にとらえる読解力・論理的思考力を問うた。資料全体を読まずに下線部を読むだけでは、解けない問題であった。

問4では、新約聖書の資料を活用し、キリスト教における宗教的な規範と社会のルールとの関係を読み解く思考力を問うとともに、イスラームについての知識を問うことで、両者における社会認識の差異に注目させた。

問5では、古代ギリシア思想と古代インド思想に見られる社会の捉え方を挙げ、その知識を問うた。ギリシア思想における社会観は教科書記述が豊富であるが、インド思想については必ずしも多いとは言えないので、インド思想の社会観に光を当てるとともに、インドとギリシアの思想を比較する視点を提示した問題である。

問6では、古代の思想において、何を実践すべきと考えていたのか、実践を通して何を得られると考えていたのかについて、分野横断的に出題した。各選択肢はいずれも基礎的な知識を問うものであったが、問5と同様、思想同士を比較する視点を示唆する意図があった。

問7では、旧約聖書の資料を活用し、ユダヤ教の預言者についての知識と、資料から得られるユダヤ教における契約概念の理解を問うた。基本的な知識と資料読解とを結びつけることのできる思考力を求める問題だった。

問8では、イスラームにおいて旧約聖書と新約聖書が啓典として扱われ、そこに記された神もアッ

ラーと同一の存在として理解されているという教科書知識にもとづいて、2つの資料の読解を通して、ムスリム視点から見たユダヤ教徒について問うことで、イスラームとユダヤ教を比較し相対的に見つめなおす視点を求める問題だった。資料への読解力とともに、クルアーンに対する基本的な理解を必要とする問題だった。

第1問全体を見ると、複数の思想を同時に問う問題において、比較的に難易度が上がる傾向が見られた。また、各小問においては、基本的な用語についての理解の不足が、解答を困難にした可能性があると考えている。

第2問の全体のテーマは、古代から近代にいたる、理想的な社会や生き方をめぐる日本思想である。生徒会活動の中で、理想を掲げることの難しさに直面した高校生が、先生の示唆を受けながら調べ学習を行う場面を設定した。その筋道に沿って、倫理の基礎的知識を問うとともに、資料を読み取る力、倫理的諸課題について論理的に思考する力を問うことを目指した。さらにいえば、「現実主義」という名の冷笑主義が広がる昨今の状況下で、社会の諸問題と対峙する思想的構えについて考えてもらうことを意図した出題であった。

問1では、江戸時代の社会秩序をめぐる鈴木正三の思想についての理解を問うた。教科書記述についての知識を前提に、鈴木「世法即仏法」の意味を正確に理解できているかどうかを確かめる問題となった。鈴木は教科書において周縁的な扱いとなっているが、近世の庶民思想の典型をなす思想家のひとりとして、教育現場でも積極的に取り上げてもらいたいという意図を込めた。

問2では、本居宣長の思想についての理解を問うた。各選択肢において、たをやめぶり、漢意批判、もののあはれといった、教科書記述に基づく知識の正確な理解を求める問題となっている。いずれも宣長の中心思想というべきものであり、オーソドックスな設問だといえる。

問3では、最澄に関する基本的な知識と最澄の国宝の概念に関する資料読解を問うた。最澄の国宝という概念は教科書にも見られるが、その内容は必ずしも詳しく示されていない。そこで本問では、最澄が目指す理想社会と国宝的人材の意義を理解させることを目指した。

問4では、古代の他界観についての理解を問うた。神代神話、また柳田国男・折口信夫の学説についての教科書記述に基づく知識の正確な理解を求める問題となっている。なお、日本古代思想・神道思想の分野は、教科書の記述が必ずしも多いとは言えないが、重要な分野である。教科書や教育現場でも、一層充実した学習を求めたい。

問5では、日本において浄土教を広めた僧に関する知識を問うた。一遍の信不信、末法の定義、源信の観想念仏、御文の性格等を問う内容である。浄土信仰という共通の論点を介して仏教者たちの思想を横断的に理解する視点は、思想史学習の方法として有益であると考ええる。

問6では、武者小路実篤についての教科書記述に基づく知識を資料の読み取りに応用して、実篤の人間観や社会観を捉える思考力を問うた。教科書での説明と、実際の思想文献との関係性を実感的に理解してほしいという意図を込めた。

問7では、荻生徂徠についての教科書記述に基づく知識をもとに、資料の読み取りを通じて、徂徠の政治思想をとらえる思考力を問うた。教科書の内容をきちんと学習していれば、難しい問題ではない。

問8では、桑原武夫のエッセイから、ユートピア思想についての著者の考えを読み取り、さらにそれを北一輝、岸田俊子・景山(福田)英子、田山花袋らの思想と関わらせて捉えなおす思考力を問うた。桑原は教科書で取り上げられていないが、解答する上で桑原についての知識は必要ない。本小問の資料は、現代を生きる人間が理想とどのように向き合うべきか、という問題を考えるうえで重要な示唆を与えるものであると考える。

第3問のテーマは「動物」である。ただし動物倫理ではなく、動物を考えることで「人間とは何か」

を、また「倫理的配慮が必要な対象とは何か」を考えてもらうことをコンセプトにした。教科書の西洋近現代思想のパートには動物に関するまとまった記述がないため、過去の哲学者たちが動物をどのような存在として位置付けていたのか、その点の理解を助けるリード文を冒頭に置いた。そして最後の趣旨問で、リード文と動物解放論に影響を与えたベンサム資料を読んだ高校生が、これまで多くの哲学者たちが動物を論じてきたことを知ると共に、人間以外の動物も視野に入れた倫理を考えていく必要に気付くという場面設定にした。また、哲学者たちが動物について論じた文章にも触れてほしいと考え、ベンサム以外にも、カントとハイデガーの資料を問題文で使用した。そして、動物を直接問題にしていない他の設問でも、人間の本質について論じた哲学者たちの知識を問題にして、これまでの倫理が人間に偏った倫理であった事態にも気づいてもらうように工夫した。

問1～3・5・7は近代西洋思想についての知識・理解を問う問題である。哲学者とその思想のキーワードをただ関連させて憶えているだけでは正しく解答できず、思想内容の正確な理解を要求するような問題作成に努めた。

問1は、モンテーニュの思想に関する知識問題である。選択肢のウでは、モンテーニュがモラリストと呼ばれるようになった理由を正しく理解できているかどうかを問題にした。

問2は、ライプニッツの思想に関する知識問題である。時代的にも思想的にも近いスピノザとの違いを正しく理解できているかどうかを問題にした。

問3は、ロックの思想の説明で適当でないものを選ばせる問題である。出題方法に工夫を凝らし、昨今話題にもなっている生成AIに学生が質問をしたという場面設定にした。

問5は、進化論についての問題で、ダーウィンの進化論が社会に与えたインパクトや、スペンサーの社会進化論などを正しく理解できているかを問題にした。

問7は、現象学に影響を受けた思想家に関する知識問題である。ボーヴォワールや九鬼周造も選択肢に加えることで、20世紀の現象学が様々な思想家たちに影響を与え、現象学運動という大きなムーブメントを引き起こしたことを知ってもらうことを意図した。

問4と問6は、哲学者の思想の知識・理解と資料の正しい読解とを問う、複合的な形式の問題にして、難易度が高くなるように工夫した。

問4は、カントの思想の理解と資料読解の正確さを問う組み合わせ問題である。カントが動物について言及した二つの資料を提示することで、カントが動物という存在をただ否定的に論じていたわけではないことにも気づいてもらえるように工夫をした。

問6は、ハイデガーの思想の理解と資料読解の正確さを問う組み合わせ問題である。ハイデガーの動物についての理解とともに、彼が動物と人間とをどのように区別していたのかもわかるように、資料を選定した。

問8は、過去の哲学者たちの動物に関する議論と、ベンサムの資料をもとにした先生と高校生との会話の内実を正しく読み解けているかを問う趣旨問である。大問全体に関わる問8には、私たちが古典に学び続ける意義や、倫理的配慮の対象となる存在とは何かを考えることの重要性を伝えるというメッセージを込めた。

第4問を通じての全体的なテーマは、インターネット、特にSNSを利用する際の倫理である。現代社会において、誹謗中傷や差別主義的な語りの拡散など、インターネットの利用と結びついて諸々の社会問題が現実を生じており、制度的な規制も議論されている。これに対して本問には、利用者の倫理的な姿勢に、あらためて目を向けてほしいというメッセージを込めた。構成として、匿名性や双方向性といったインターネットのメディアとしての特性と結びついた問題に触れ、また古典的なステレオタイプの議論を再訪した上で、あらためて利用者の意識を問うという形で問題を配列した。

以上の趣旨と特に結びついているのは問1・3・6・9である。また、大問を通して、共通テスト

で求められる資質・能力をバランスよく問うことを目指し、青年期の心理（問５・７）、現代思想（問８）、現代社会の課題のうちの生命（問２）、情報（問３）、多文化（問４）についての出題を含めた。

問１は、大問の趣旨に即した資料を読み取らせる問題である。SNSへの投稿に含まれる感情表現に関する調査の説明及びその結果を示すグラフを提示し、与えられた情報を元に論理的に思考し判断する能力を問うことができた。

問２は、生命に関する倫理や法についての問題である。臓器移植法や出生前診断など、多くの教科書に記載されている基本的な知識を聞くことができた。

問３は、大問の趣旨と関連して、メディアに関する思想家や事柄についての知識を問う問題として作問した。

問４は、多文化・多宗教状況についての問題である。人々の共生とそれをめぐる課題に係る用語の理解を問う出題ができた。インターネットがヘイトスピーチやエスノセントリズムと結びついてしまっている状況を意識して作問した。

問５と問７は青年期の心理に関する出題である。問５は、青年期の心身の発達・成熟に関する知識を聞いた。問７は、特性論と対比させながら類型論的な性格の捉え方に関する知識を聞く問題として作問した。

問６は、ステレオタイプに関する、リップマンの資料の読解問題である。ステレオタイプは偏見を助長するものとして捉えられがちであるが、本問では、もともとリップマンがどのような議論を行っていたか、資料に基づいて考えさせ、理解を深めさせることができた。

問８は、個人と社会の関係を論じた思想家についての知識を問う問題である。リバタリアニズムとコミュニタリアニズムの違いを把握しているかどうかを問うた。

問９は、大問の趣旨と関連した問題である。リード文Ⅱ、および本小問の文章を読み、それらの記述を理解したうえで、インターネット上でコミュニケーションを行う際の姿勢について、大問の趣旨に適した倫理的な姿勢を含む記述を選ばせる出題ができた。

３ まとめ

今までの委員の経験を全体として共有しつつ、具体的な倫理的諸問題への関心を受験者に呼び起こすような問題の作成に当たった。その結果、正確な知識と資料の読解力、そして思考力を総合的に問う、意欲的な問題が作問できたと考える。

追・再試験を受けた受験者が少ないため、統計的な評価はできないが、全体としてバランスの取れた適正な難易度の問題を作問できたと考える。

旧課程での出題は今回で終わるが、旧課程の作問のなかで多くの有意義な経験を蓄積することができた。新課程においてもこの経験を、質の高い作問のために活用することが重要である。